

捨

てるのをためらった物の一つが、母のミシンだった。業務用の足踏み式で、すこぶる重い。ミシンそのものが非常に重いので、それを支える脚やペダル、駆動部分はどれも頑丈な鉄製でもっと重い。そのまま運んでけがでもしたら元も子もないので、解体して処分することにした。亡くなって七年になるのに、これまで手をつけてこなかった。大変そうだから先送りしたのではあるが、それよりも気が引けたからだった。

小ささまざまなネジで組立っていたが、どれもすると回った。小さな体を折り曲げて隅々まで念入りに油を差していた母の姿が浮かんだ。ミシンを外し、木製の台を外すと、脚とそれをつなぐペダルが所在なげに立っている。持ち上げるとどうにか動いた。一人では心許ないが妻に手伝ってもらえば運べそうだった。

学校から帰ると、母の仕事場に行き、「なんかない？」と聞くのがぼくの日課だった。おやつがある時は、どこに何があるのか口早に教えてくれるのだが、目はいつも手元に注がれたままだった。視線の先にあるのは針。手縫いだらうとミシンだらうといつだつて針先を見ていた。プツッ、プツッと小さな音がして針が布地の中に滑り込み、糸をつれて飛び出していく。ぼくもそれを目で追いながら、学校であつたことや読

んだ本の話をした。

「おまえさんの話はおもしろい。」

時には声を上げて笑うものだから、ぼくも話すのが楽しかった。話している、ぼくを見ることはついぞなかったが、それをさみしいとも思わなかった。

父は、針仕事に打ち込む母を時に疎ましく思ったように、「こぎゃんかっこして仕事しちょう」と言つて、針を一心に動かす母をまねて見せたことがあつた。少し大げさに。母はいつまでもそれに腹を立てていた。それは、ぼくにとつても許しがたい行為だった。あなたが毎日酔っ払つているときにお母ちゃんはそうやって働いているのだ。

脚だけになったミシンを見て、妻が「それで机を作つてもらつたら」と言つた。はつとした。いいアイデアだと思つた。昭和レトロでデザインされた店などでよく見かける。椅子に座つて、ペダルに脚を置いてみた。高さもちょうどいい。ペダルをわずかに踏み込むと接続された輪がゆつくりと回転した。仕事に飽きたらこれ踏むのもいいか、と思つた。

「やつぱりやめとく。」

「えっ、どうして。」

妻が驚いている。ぼくにもよくわからない。ちよつとだけためらつた、それだけで十分な気がしたので。

2021.6.28

専門ババ奮闘記(その2) 58

木幡智恵美

虫捕り(5)

市内の小中学校が五月二十五日から再開すると報じられた頃、「来週から寛大と実歩を保育所に行かせようと思つて。二人とも、おうち生活で大分ストレスが溜まつてるに」と娘が言つた。義母を送り出してから玉湯に行つて子守、家に来た時は義母の様子を見ながらの子守。子守が無くなると、身体の負担は少なくなる。でも、孫たちと毎日には会えないのか。寛大と実歩が保育所に通い出した日、義母をデイサービスに送つたあと、畑に出かけた。キャベツとブロッコリーの苗が大きくなつてきたので、夫はそれらを移植するところを起し、施肥、私はオクラとインゲンの種蒔きだ。種を蒔く所の草の根を取ろうと土をさぐると、カヤツリグサの根が無数にある。これまで地中深くまで白い根を張り巡らせるカヤに苦しめられ続けてきたが、今やカヤツリグサが取つて代わつていく。直径一センチくらいの黒い球根から黒糸のような物が延び、どんどん球根を増やしていく。それらが土の中からごろごろ出てくるのだ。種を植える前に取り除いても、野菜の芽が出てくる頃にはその周り中カヤツリグサの葉が埋め尽くす。空しい作業だと知りつつ、憎き黒い塊をあらかた取り除いた後、種を蒔いた。目印にする支柱を物置に取りに行くと、その一本に薄茶色の物が。カマキリの卵だ。寛大が卵から孵化するところを見たいと言つていた。帰りに持つて行つてやろう。

娘の家に寄ると、授乳中だった。宗矢に乳を飲ませながら娘が言う。「毎日、寛大と実歩に何をさせようか考える時間が無くなつて、何か怠けているような気がするに」。娘の心の中にも穴が空いている。「しゅうちゃん」と声を掛けると、乳を含みながら宗矢は笑つた。毎日顔を合せてきたので、私を安心できる人と認識してくれたのだ。夫はまだまだ見知らぬ人の域を出ていないようで、顔を見せると泣きべそをかけた。

そして、迎えた週末、寛大、実歩は明るい顔でやつてきた。寛大は虫捕り網を手に、実歩は私と手をつなぎ、娘は宗矢の座る乳母車を押し、バッタの公園に出かける。寛大に付いて蝶を探していると、何と、たまたま目に入った木の枝に、でっかいカマキリの卵がへばりついているではないか。二つ目の卵だ。これで、寛大念願のカマキリの孵化が見られるぞ。



30代フリーター やあ、ジイさん。新型コロナウイルスのワクチンには人びとをマインドコントロールするナノチップが入っている、といった陰謀論をネット上で見かける。

年金生活者 ワクチンには人の気分を変える作用があり、いま普政権が接種の拡大で狙っているのも一種の「マインドコントロール」だろう。

ウイルスを絶滅させることができない以上、感染はこれから先も拡大と縮小を繰り返すだろう。だとしたら、コロナ禍を終息させるには国民の「マインド」を変えるしかない。つまり感染があっても「安全安心」であり、ウィズコロナが当たり前と思うように国民を仕向けることだ。その決め手となるのがワクチン接種だ。菅義偉らはそう考えていると推察できる。

ワクチンの効果について政府は、感染予防効果は十分には明らかになつていないとする一方で、発症予防効果はあると言っている。ワクチンで感染が減らなくても、発症、重症化を抑えら

れるなら、医療の逼迫の恐れも薄らぐはずだ。この点を強調すれば、感染はあつても「安全安心」なので、ウィズコロナで行きましよう！とアピールできる。

30代 政権は五輪もウィズコロナを定着させる機会と考えているのかもしれない。

年金 五輪には嚴重なコロナ対策が施されるから、これまで経験した程度の感染の拡大はあつても、開催が直接の原因と思わせるような感染の急拡大の可能性は低い。国民も「大丈夫かも」と次第に思い始めるだろう。五輪もまたワクチンと並んで国民のマインドを変える要因となり得る。

30代 そんなに樂觀できるのか。

年金 菅義偉は本音では、コロナを高齢者や基礎疾患のある患者以外にとつては普通の風邪に近いと考えているのではないか。GOTOトラベルの実施にあればどこかわつたのは、コロナをそんなに恐れていなかつたからと推察される。それなのにGOTOを断念したのは、医師会

や病院業界、感染症専門家らの力に押されたからだ。その背後には彼らを支持する国民世論があつた。

感染拡大による医療の逼迫を恐れる医療界は、コロナの怖さを国民にアピールし、ひたすら自粛を求め続けた。もともと医療に厚い信頼を寄せていた国民は、未知のウイルスへの恐怖が加わつて、彼らの言うことに忠実に従つた。世論に一喜一憂する政権はそれに逆らうことができなかった。ワクチンと五輪は、そうした力関係を逆転させる切り札のように菅政権の面々は映つているに違いない。

人出の回復が示しているように、国民が以前のようない強い自粛をしなくなつたことも彼らには追い風となつているかもしれない。

30代 「自粛警察」も鳴りをひそめたようだしな。

年金 自粛警察の正体は、他人にも自分にも掟の厳守を求めないではいられない強迫的な傾向を持つ人物ではないか。この世界は隅々まで掟で組み立て

られていて、そこで生きていくことは、その掟をすべてのことに逐一当てはめていくことであり、掟に背くことは生きることをあきらめることだ。当人はそう思っているのかもしれない。

そう推察するのは私自身にいくぶんかその傾向があるからだ。何かをしようとするとき、その掟がどうなつているのかをまず知りたくなる。知つたらそれに忠実に従いたくなる。そこから外れていないか絶えず気にかかる。

30代 なぜそうなるんだ。

年金 掟を過剰に守ろうとする傾向の起源は、生誕時にさかのぼる。万能感と快感に浸ることのできた母胎の楽園をいきなり追われ、この世界の荒れ野に放り出されたとき、人間はそれまでとは違う未知の過酷な掟がそこを支配していることに気づく。楽園と荒れ野の落差を思い知らされ、一刻も早くもとの楽園に帰りたいと切望する。

だが、それはかなわず、望めば望むほど落差は大きく感じられる。それを縮めるには掟を知り、それに従うしか

ニュース日記 790
中村 礼治

政権はコロナをどこに着地させたいのか

ない。どんな掟なのか懸命に知ろうとし、知れば必死でそれに従おうとする。掟が未知であることがその衝動を強める。

30代 だれでも自粛警察になり得る。

年金 そうではない。生まれたばかりのとき、過つて床に落とされたとか、何かにつつけられたとか、トラウマを負うような体験をすると、楽園と荒れ

野の落差はいつそう大きく感じられる。それを縮めようとする衝動はさらに高まり、掟に忠実であろうとする傾向はますます強まつていく。

少し成長して、たとえば母の情緒が落ち着かなかつたり、仕事が忙しかつたりして、授乳や排便の世話をたびたび中断するようなことがあれば、乳幼児は生誕時に感じた落差と同様の落差を感じ、ふたたび楽園への帰還願望を強める。それを縮めようとして掟に隷従するようになる。

掟に背けば生きていけなくなるといふ無意識の思い込み、生きていくことはそのつど物事に掟を当てはめていくことだという思い込みが、こうして定着する。しかし、掟を厳格に守ろうとすればするほど、現実には掟どおりにはいかなくなる。とりわけ他人が介在するとそうだ。掟どおりにいかないのは、掟が厳しく守られていないからだ、と本人は考え、ますます掟に囚われていく。自粛警察になる条件がそらい始める。